

民事模擬裁判報告

— 参加学生のホンネ —

学生編集委員 有谷さくら／尾崎仁淑／高畑冬香

はじめに

平成20年7月、2年次前期の必修科目である「民事実務」の講義の一環として、民事模擬裁判を行いました。裁判当日は、上級生や研究者の先生方、卒業生も傍聴に多数同席していただき、熱の入った弁論が展開されました。

そこで、私たちがどのように準備に取り組んで当日に挑んだか、講義を通じて何を考えたかをご紹介しますために、履修者にアンケートを募りました。

模擬裁判の進め方

履修者は約3ヶ月間民事実務の基礎を学んだ上で、以下の4班に分かれて模擬裁判に臨みました。

原告班 原告側訴訟代理人(11人)

被告班 被告側訴訟代理人(11人)

当事者両班は、事前に与えられた事実をもとに、事案の概要を把握し、それぞれの立場から主張を組み立て、訴状・答弁書・準備書面などを作成し、証人尋問の準備をする。

裁判官班 準備及び当日の訴訟指揮および判決文の作成をする。(12人)

証人班(指導班) 準備の最初から「原告・被告本人」「証人」役を演じ、原告班・被告班の希望に添って証拠作成もする。原告班・被告班は、証人班から得られた事実関係だけを頼りに訴状作成などの準備を経て当日に挑む。さらに、当日の書記官・廷吏・スタッフなども務める。(9人)

事案の概要と結果

本件は、実際に起きた事案(東京高判平成12年9月28日判時1735号57頁)をもとにしたもので、原告と被告との間で締結された立替払契約に基づいて、原告が販売業者に対して支払ったとする立替払金につき、被告に対してその支払いなどを請求した事案です。

主な争点は、「被告は、本件契約締結についての意思表示をしたか」と「被告には名義貸しについて責任があるか」の2点となり、結果、原告勝訴となりました。

参加学生の感想

— 模擬裁判での役割は何でしたか? そしてその役割について思うところは?

原告班 「訴状の作成から最終弁論に至るまで訴訟のすべての段階に関わる。当日の陳述が裁判の勝敗の帰趨を左右しかねないので、陳述することの重みを実感した。」

被告班 「要件事実を理解していないことを痛感した。」「想定していた反対尋問が、主尋問でつぶされ、その場の対応に焦った。」

裁判官班 「限られた情報・弁論活動の中で心証形成し、合議で判決を書くのが大変だった。」「片方の当事者を敗訴させなければいけないのは相当悩ましいことだと実感した。」

証人班 「代理人から厳しい主尋問を受け、とても緊張した。緊張のあまり、証人尋問後しばらくの間、胸が苦しくなった。実際の訴訟手続においても、証人は、大変な心理的圧迫を受

けながら、尋問に答えているのだなと感じた。」

— 模擬裁判を通して、これからの日本の民事裁判についてどのようなことを考えましたか？

「直接主義、口頭主義とは名前だけのような気がする。書面を提出することばかりに気をとられた。今後は口頭主義、直接主義を実質化するための努力が必要だ。(原告・被告班)」

「権利意識が高まってきているとはいえ、裁判となると権利の主張だけでは立ち行かない。民事裁判はいつ巻き込まれるか分からないので、簡単な流れや知識はあって困らない。学校教育の場で啓発していくのも大事なのでは？ (証人班)」
「傍聴人にとっても分かりやすい裁判を心がけられるよう、法曹三者が力をあわせる必要がある。(証人班)」

— 今回の模擬裁判からあなたが得たものは？

「学んだ理論を仮定の訴訟手続に当てはめて考えていくことで、どの段階でどの書面が必要で、どの段階でどのような行動が必要かという感覚を養うことができた。(原告班)」
「尋問の困難さ。いかに引き出したいことを尋問の相手に言わせるかというのが難しく、またこれが勉強になった。(被告班)」
「証人班は、前日の練習を見事に裏切る快演をしてくれた。(原告

班)。」

「依頼者が何を求めているかを的確に把握すること、その為に必要な知識をいま勉強しているんだなと感じた。(証人班)」
「自分を見つめなおす機会になった。(原告班)」
「実務家になりたい！ との思いは更に強くなった。(証人班)」

おわりに

私たちは民事模擬裁判のためには6月の初旬から準備をし、当日は日曜日の朝に開廷・16時判決言い渡し……と、長いような短いような1ヶ月半でした。この間、連日深夜まで熱く議論し、その中でたくさんのことを学びました。アンケートにもそのような声が現れていたもので、最後に紹介します。

「問題をもう少し簡単にするなど工夫が必要だと思います。特に定期試験前に模擬裁判の準備に多くの時間を割かなければならなかったのは大変でした。」
「もっと先生に助言を求めればよかったと思っています。」
「10人以上の人数で、ひとつのプロジェクトで結果を出すのは至難の業です。大変でしたけれど、自分のチームのメンバーと一緒に仕事できてよかったです。一緒に勉強できる仲間と出会えて、ロースクールメリットのひとつを実感しました。」